

中世・草戸千軒探検 ②4

～商う(銭の保管・流通)～

草戸千軒 I 展示室では、今からおよそ600年前の南北朝時代を中心とする時期の、草戸千軒の町並みを実物大で復元するとともに、実際の出土資料を生活の場面ごとに分類して展示し、人々の生活の様子を詳しく紹介しています。

今回からは、「商う」のコーナーに展示された資料を中心に、この集落でどのような経済活動が繰り返げられていたかを見ていくことにしましょう。



【写真1】 亀山焼の甕に納められた銭



【写真2】 錆び付いた銭の塊

日本における最も古い貨幣は、西暦683年に铸造された「富本銭」とも言われていますが、国内に広く流通した最初の貨幣として知られているのは、708年铸造の「和同開珎」です。その後、朝廷は「乾元大宝」(958年铸造)まで都合12種類の貨幣を発行しますが、平安時代後期になると貨幣は铸造されなくなり、鎌倉・室町時代を通じて朝廷も幕府も公式な貨幣を発行していません。

しかし、商品の取引や流通に携わる人々は貨幣の無い社会は考えられなかったらしく、平安時代後期の12世紀中頃から中国の北宋(960～1127)を中心とする時代の貨幣を大量に輸入し始め、自分たちで勝手に価値を決めて流通させていました。政府も、最初はこうした輸入貨幣の利用を禁止していましたが、鎌倉時代の中頃以降は容認せざるを得なくなってしまいます。

草戸千軒町遺跡からは、中世の社会に貨幣経済が深く根をおろしていたことを示す様々な資料が出土しています。

写真1はその一つで、現在の岡山県倉敷市で生産された亀山焼の甕を地中に埋め、その中に12,591枚の銭を納めたものです。金融業者の金庫のような役割を果たしていたものと考えられます。写真2は、筵などに包んだ約5,000枚の銭の塊が錆び付いた状態で出土したもので、これも当時の銭の保管方法を示しています。

いずれの資料も、北宋を中心とする中国の銭が大部分を占め、中央の穴に紐を通して、97枚を単位として束ねられています。当時は銭一枚を一文と数え、百文の束を一緡と呼んでいました。ところがこうした出土資料の発見により、百文で取り引きされた一緡の束が、実は100枚でなく97枚しかなかったことが明らかになってきたのです。

草戸千軒町遺跡の出土品は、中世における商取引の実態を明らかにしましたが、こうした商取引の習慣が成立していた理由については、まだ十分に解明されていません。

(主任学芸員 鈴木康之)